

「柏崎刈羽原子力発電所の透明性を確保する地域の会」との交流会 感想
「原子力安全規制における社会的意思決定のあり方に関するラウンドテーブル研究会」

有志一同 06.12.14

○小田委員

氏田主管研究員のメモにもあるように、私も非常に成熟された議論がなされていることに感銘を受けました。

私は以前電力におりまして、広報、広聴を中心に仕事をやってまいりましたが、その中で地域懇談会というものがあり、地域の方の声を拾い上げて事業活動に反映させていくという会を営業所などで行っているわけですが、そういう電力系の地域懇談会なんかと比較しても、非常に大人で本音に近い意見、本音が出てきていて、とても実りある議論だなというふうに思いました。

あと、地方の経済産業局の方でも、原子力広報懇談会というものを開催しておりました。私も出席したことがあるのですが、そういった場ではやはり表面的な報告とやりとりしかなくて、それで質問の数も少ないというようなことがありました。

そういった電力系や地方の局の懇談会と比べると、議論の中身の濃さ、コミュニケーションの密度、双方向性といったものが格段に深くて、とても感銘を受けてまいりました。

○久郷氏

私も小田さんがおっしゃられているのとほぼ同じですけれども、つけ加えるとすれば、えてしてこういう会を立ち上げる時は、やっぱりカラーが分かれて、推進派寄りの会であるとか、反対派寄りの会合であるとかというふうに分かれるのですけれども、同じテーブルに着いているということに対して、時間があれば、その辺、最初の段階でどんなご苦労があったのかを聞いたかったなと思います。一般的には、これは非常に難しい行為で、特に電力会社など、反対派の人に対して同じテーブルに着こうという意識がかなり薄いと思いますので、こういう意味では非常に希有な会議だったなと思いました。

あと2つ感想としましては、発信の仕方なのですけれども、えてしてこういう会議というのは、内輪でこもってしまいまして、同じ人が同じような、その人たちのレベルは非常に深まるんですけれども、それが外に向かってなかなか発信されにくい、見えにくいとい

うことが、勉強会などはそうなのですけれども、単なる勉強会で終わらずに、市民全体に向かってかなりいろんなチャンネルを通じて発信がされている。物理的なホームページとかマスコミに取り上げられるとか、そういうものではない何かエネルギーみたいなものがあるように感じたので、これがどうしてできるものなのかなというのは非常に興味があります。

もう1つは、ちょっと重なるのですけれども、月1回これが開かれていて、継続してもう42回開かれている。さらに、運営委員の方は、その合間に月1回の運営会議が開かれているということで、2週間に1回ぐらいは必ずこれが開かれていて、さらに自分の資料の勉強みたいなものがあると思うので、非常にプライベートな時間が犠牲になっているのでして、それもいとわず続けられているというエネルギーがどういうところから出てくるのかというのに非常に興味があります。これを刺激することによって、原子力に対する理解とか、原子力に限らずいろんな社会協力活動みたいなものに対するきっかけになるのだらうなと思いますので、その辺は非常に興味があるところで、今後も引き続きまたトレースしていきたいなと思っています。

○柴田委員

行く前の感じでは、長く続けているのだけれども、多分歩いているうちにくたびれちゃって、すり切れているじゅうたんみたいになっているのではないかと思って行ったのですけれども、全然そうではなくて驚きました。しかも、皆さんの意識が高い、活動を見ているでも全くうそがないという点でも感動したのですけれども、さらに言葉を持っているというのでしょうか、私も田舎者なのでわかるのですけれども、田舎の間違って思っている、翌日ぐらいに、あっ、きのうの会合はこういうことを言えばよかったと思うというのが普通なのですけれども、非常に言葉をしっかり持っている、つまり自分の意識をきちんと持っているということで、地に足がついた活動というか、非常に強靱な知性を持っている一般人というのが確かにいるのだな、という気がしました。

実際に女性の方たちの方が特に語り口は成熟していたような気がするのですけれども、ある主婦の方は、やっぱり毎週出てこいというのは結構大変なのだけれども、それでも世界一のそういうサイトを持っている地域の住民として、こういう活動に自分の時間を割くというのは当然の責任だということをおっしゃっているのにはびっくりしましたし、あと共生、つまり究極的に賛成なのか反対なのかという話はここではしないということをもん

な確認しているというふうなことをおっしゃっているのです、そうってはなんですけれども、東京でやっている下手な大規模なそういった活動の場よりも、非常に成熟しているなという印象を受けました。もう1回行ってみたいかなという気がしました。

(事務局(氏田) もう1回やりたいですね。)

○城山委員長

大体皆さんと同じような印象なのですけれども、若干補うと、1つは、人というのはすごく大事だなと思いました。先ほど柴田さんご紹介していただいた、選ばれてどこかの地区から来られた主婦の方も、すごくリアリティーのある言葉で語っておられて、それはそれですごく考えるところがあったのです。

同時に、一方では、最初1年は部長さんが会長をやられていたようすけれども、途中から会長をやられた方とか、実際に結構荒れるテーマのあった日にたまたま我々行ったのですけれども、にもかかわらず、見事な議事運営というか、回りを見れば、ちゃんと反対派の人に配慮してしゃべってもらって、最後に賛成派の人にもちゃんとした距離感でしゃべってもらうとか、ある意味では、ああいう人が現場でどうやって出てくるのかというのはすごく興味深いなと思いましたけれども、会長さんのある主のファシリテーター的な役割というのはすごく大きかったかなと思います。

もう1つは、柏崎市の今の担当の課長さんなり、彼はつくったときは担当の補佐だったというお話でしたけれども、そういう人が現場で受けとめてちゃんと組織設計をしたというのはすごく大きかったのだろうなと思います。伺っていると、もともとは賛成派、反対派がいるという以前に、だれが東電の関係で食べている人かもよくわからないコミュニティーなので、そもそも外ではこういう話はしないというカルチャーだったというところに、ちょうど当時、東電の問題が起きたときにプルサーマルの住民投票なんかも起こった。そういうタイミングだったというのもあるのでしょうかけれども、そういうタイミングで市の方が仕掛けて、賛成派も反対派も出てくる。でも、賛成、反対の話はしないで、とにかく安全という話だけに限って議論をする場をうまくつくったというのがある意味では最初のきっかけだったのかなと思います。

もう1つは、責任感を持って皆さんが議論されているというのに感銘を受けたということは何人かおっしゃいましたけれども、そのときに結構重要かなと思ったのは、公募をするという議論も今もされているようすけれども、そうではなくて、主要団体というのを

20数個見つけてきて、そこの代表で出てきていますと。ある意味では、そういう基礎になる団体というのはしっかりしているので、そこの代表で出てきている責任感というのはやっぱりあって、そういう中でこんなに大変だと思わなかったのだけれども、やるのだったらちゃんとやらなきゃいけないという責任感を持って皆さんかかわられていたなというのはすごく重要な要素だったかなと思います。

○エネルギー総合工学研究所 氏田

大変成熟した会、また会員であった。できた当初はずいぶん激論があったようだが、今は言うべきことはきちんとするという大人の議論ができる。また人間関係も、保安院や県や市の担当者、事業者、推進派や反対派や中立派、が大人の付き合いができています。

4年にわたり、夜の6時から10時くらいまでかかる会議を毎月1回、延々と42回もやってこられたのは不思議でならない。人間関係も大変だろうし、自分の生活を犠牲にしてボランティアで活動することも。熱意も続かないだろうし・・・

話を聞いて見ると、金は県から、アレンジは市から、事務局はNPOで、そして会員や幹事は各団体から代表としてボランティアで出てくるという、まるでアマルガムのような存在で、いわゆるファシリテータがいない。科学技術社会論、STSでは中立のファシリテータが存在するモデルが標準だろうし、いないと利害関係がぶつかりうまくいかないものだが。

どうしてそうなのかを聞いて見たが、

- 共生をテーマにせず安全のみを議論したことが良かった。
- 全面公開にしたことが良かった
- 地域を愛するから当然
- 世界一の原子力を持つ住民なら頑張るのが当然
- 住民の代表として頑張るのが当然

日本ではなかなか見られない大人の関係が、保安院や県や市の担当者、推進派や反対派や中立派、そして事業者も含めて成立しているのは、稀有の例として関心を持って見守り続けることが大切である。

今回は、データ改ざんの不祥事もあり、おおもめになるとのことだったが、冷静な意見が多く大変感心した。反対派の意見は、事業者は営利企業だから多くは期待できないが、

行政側のチェックが甘いことを反省すべき、一方の推進派は、応援する立場からして大変遺憾だが、自己点検で発見し即座に公表したことを前進と見よう、という意見が多かったようだ。

○エネルギー総合工学研究所 蛭沢

柏崎地域の会の取り組みに関する印象などは、既に他の方々が述べられた多くも私の思うところと一致しておりますので、少し違う観点のことをのべさせていただきます。

賛否が大きく分かれる傾向のある原子力発電に対し、そこに生活されている方々は、真っ正面に向き合って行かざるを得ない現実があるということに強い印象を持ちました。それは、東京で働き、生活していると、わかり得ない部分です。一般的に、原子力発電所を巡って聞こえてくるのは、私の認識不足もありますが、賛成と反対のそれぞれの方々の複雑に入り組んだ対立構造ということでありました。ところが、今回お話を聞かせていただいて、そういう単純なことではないということにあらためて気づかされました。感じたことのうちの一つは、人々が相互信頼のなかで生活の場をよりよく生きる、ということではないかということでした。これはひょっとしたら、大きな勘違いかもしれませんが、私にはとにかくそのような印象が第一に浮かんだことです。このあたりが、その後活発に続いている活動の下地になっているのではないかと思った次第ですが、間違っていますでしょうか。このように思ったことの一つに、「ファシリテータがいなかった。いない方がかえってよかったかもしれない」との言葉がありました。調整能力あるいはある種のリーダーシップ的な能力のある個人に引っ張られるということではなく、人々の「思い」がファシリテータにかわる求心力であったのかな、と勝手に考えた次第です。

あらためまして、お忙しいところ、時間を作っていただき貴重なご意見を聞かせていただくことができ誠にありがとうございました。

できましたら、またお伺いしてお話を伺いつつ、意見交換などさせていただければ大変ありがたく存じます。